第三章　本研究の目的と意義

3-1　本研究の目的

本研究の目的は、読者組織を持った婦人雑誌の変遷を追うことにより、組織形成母体としての情報媒体の役割と、その継続力を支えた情報の送り手側の戦略を解明することである。

具体的には、１．雑誌記事内容、２．読者組織の活動、３．雑誌と読者の関係性の 3 点についての変化の様子を分析していく。その際、その背景として、政治や経済の変遷はもちろんのこと、女性の権利拡大による社会参加の普遍化といった潮流にも着目する。

これにより、１．読者組織を伴ったことで、雑誌がどのような特徴のある情報を提供してきたのか、２．より多くの人々を社会参加に導く情報提供システムに必要な要素や条件についても考察を深める。

さらに、女性の社会参加の普遍化という視座からは、社会参加を足がかりに、情報の受け手が、地域にどのように踏み込んでいったのかにも着目していく。

3-2　本研究の意義

本研究によって、近代女性史や組織研究の分野で語られることのなかった、超長期に継続している女性組織の変遷を明らかにすることができる。また、マス・コミュニケーションの研究分野においては、女性による雑誌の共同体的受容の一事例として提示することが可能である。しかし、これらは本研究の副次的産物にすぎない。

本研究は、女性においても自発的結社の創造が普遍的な現代にあって、雑誌の送り手が意図的に作った読者組織という旧来のモデルを、あえて提示するものである。その理由は、その変遷を明らかにし、媒体の役割や送り手の戦略を解明することが、今後ますます増えるであろう、情報を媒体とした広域の社会参画システムのデザイン設計に示唆を与えうると考えたからである。

3-3　本研究の対象

本研究では、研究対象として婦人総合雑誌『婦人之友』を取り上げる。その理由は、1903（明治 36）年創刊の『婦人之友』[1] が 1905 年創刊の『婦人画報』[2] とともに今日まで発行され続けている女性向けの雑誌であり、1930（昭和 5）年には読者組織も設置し今日まで継続しているからである。読者組織が、環境問題等の社会問題解決に向けて積極的に取り組んでいることも見逃せない。

本研究では、とくに、この雑誌の創立者が読者組織を成立させたときに主張した「家庭生活の合理化」にも着目する。今では陳腐であるといえる生活改善や家庭生活の合理化は、明治時代の終わりから大正時代にかけて婦人雑誌を賑わしたスローガンであるが、この雑誌においては現在も継続的に唱えられている。つまり、このスローガンはこの雑誌におけ

る情報の送り手側の重要な「戦略」であるはずで、それが読者によってどのように解釈され遂行されてきたかを見極めていく。

3-4　本研究の方法

本研究では、『婦人之友』誌の内容データを中心に調査していく。『婦人之友』誌現物はできる限り入手することに努めた。その結果、とくに戦後発行のものはほぼ 7〜8 割程度入手することができ、これらを調査対象とした。戦前発行の号は目次のコピーの入手に努めた。入手できなかった号のうち、創刊直後のものは、紙質の問題からコピーできないものもあり、所有している図書館で書き写した。1910（明治 43）年以降発行号は、ほぼ全号の目次のコピーを入手し、記事タイトルを把握した。

聞き取りは、読者組織メンバーはもちろん、以前に読者組織になんらかの関わりのあった人と婦人之友社の元記者にも行なった[3)]。聞き取り内容は、所属読者組織の歴史的経緯、構成と活動内容、婦人之友社に関して知っていること、そして読者組織に入ったきっかけや想いなど、聞き取り対象者の個人的なことである。

そして、婦人之友社発行の創立者の著作集（全 21 巻）の一部と雑誌以外の出版物、読者組織が残した雑誌以外の出版物や周年記念の冊子、家計簿調べのデータ集、過去の展覧会図録などで補完した。

3-5　本論文における言葉の定義

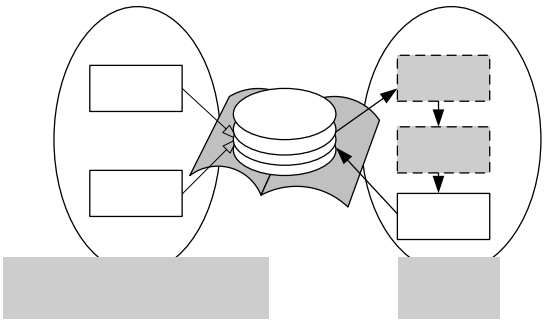

図 3-1　『婦人之友』の情報提供イメージ

ここで、本論文で用いる言葉の定義を示しておく。

本論文における「送り手」とは、編集者と、編集者が執筆を依頼した文化人や識者を指す。「受け手」は、一般的な個人読者のほか、共同体としての読者組織も指す。読者組織のメンバーも記事を書くことがあるが、それは「送り手」の意志を反映したものであると考え、図 3-1 に示すように「受け手」側とする。

また、読者組織が同属意識を持って雑誌の内容を「受容」し、それを土台に「研究」を行い「実践」するという一連の過程を促す読書行為を、「共同体的受容」行為と定義する。

ここでいう「共同体的受容」とは、組織メンバーが一つ所に集まって読書し活動する場合と、各自で読書しその想いを共有したうえで組織活動に及ぶ場合の両方を示す。

3-6　本論文の構成

本論文は 7 章から構成されている。本章以降、第 4 章では、研究の対象となる『婦人之友』や、その創立者の羽仁もと子、読者組織である『全国友の会』（以下、『友の会』）についての概要を述べる。第 5 章では、『婦人之友』誌の内容分析データによって、その時代変遷を辿る。第 6 章では、前章データにヒヤリングデータとその他資料データをすり合わせて、とくに送り手と読者との関係性の変遷を明らかにしていく。そして第 7 章で、『婦人之友』誌の「家庭生活の合理化」という戦略について考察したうえで、『婦人之友』が読者組織に果たしてきた役割を述べ、結論づける。

【注釈・引用】

1）創刊時は『家庭之友』であるが、名称変更の詳細は後述する。

2）岡満男：この百年の女たち―ジャーナリズム女性史―, p39, 新潮社（1983 年）に、「『婦人画報』は 1944（昭和 19）年 5 月『戦時女性』に統合され、敗戦後の翌年 10 月復刊するまで一時的な中断がある。この点、『婦人之友』は戦争中の中断もなく、今日まで婦人雑誌の長寿記録を年々更新しつづけているわけである。」とある。

3）雑誌発行元からは、聞き取り調査を断られた。